


平成28年度「国際常民文化研究機構」(B)共同研究(奨励) 申請書
(文部科学省 共同利用・共同研究拠点)

| | | | |
|------------------|-----------------|---|--|
| 研究課題名 | | 宮城県気仙沼大島における遠洋漁業の歴史的変遷に関する研究—震災救出資料を中心として— | |
| 申請者氏名 (研究代表者) | | (ふりがな)ちば かつえ 千葉 勝衛  | 所属機関 職 専門分野 大島漁協文庫の会 会員 漁業史 |
| 研 究 組 織 | 氏名 | 所属機関・職・専門分野 | 分担課題 |
| | 千葉 勝衛 | 大島漁協文庫の会・会員・漁業史 | 1.総括 2.研究分担 和船時代の漁業 |
| | 水上 忠夫 | 大島漁協文庫の会・会長・漁協史 | 研究分担 機械船漁業 大新丸 |
| | 菊田栄四郎 | 大島漁協文庫の会・会員・漁船史 | 研究分担 戦後の漁業 前川漁業部 |
| | 小山由紀子 | 大島漁協文庫の会協力者・外畑文書 管理者・地域史 | 研究分担 和船時代の漁業 |
| | 川島 秀一 | 東北大学・教授・民俗学 | 研究の指導と助言 |
| | 蝦名 裕一 | 東北大学・准教授・民俗学 | 研究の指導と助言 |
| 大川 啓 | 神奈川大学・准教授・日本近代史 | 研究所との連絡と指導 | |

研究目的と期待される成果

宮城県大島地区は、昔から沖合漁業が盛んで夏のカツオ漁、冬の流網漁など四季を通じて回遊する魚群を追って活躍し、その技術は近隣からも大きく評価されてきた。こうした大島における沖合漁業の資料は、当時漁業経営を行なった旧家や漁協、旧役場に所蔵されていて、一部は国立研究開発法人水産総合研究センターに収蔵されている。大島の遠洋漁業の歴史については、これまで部分的に和船による漁業から太平洋、大西洋へと進出して操業する時代までを通して体系的な研究は見られなかった。今回、大島漁協文庫の開館により、漁業資料が整備されたのを機会に、文庫内資料や地区内に所蔵されている資料等を利用して、大島における遠洋漁業発展の歴史を解明するために研究主題を設定した。研究対象年代は、明治初年から現在までとし、その間における時代的な特徴に基づいて、次の小テーマを設定して共同研究を進める事にしたい。【1】和船時代の漁業(明治初年から同末期まで)木造10メートル程度の和船での鰹漁を中心に、船の構造、漁撈組織、水揚高と分配などについて研究を深めたい。【2】機械船時代の漁業(大正から戦時中)この地方にも明治末期には、機械船が導入され、大島でも大正元年に第1号の機械船が操業している。機械船の操業に船長、機関士免許が必要な時代となったので、当時の菅原熊治郎村長は、養成講習会への参加を勧め助成金の支給をして支援したので多くの有資格者が出て、この地方の遠洋漁業の発展の原動力となった。菅原村長は、当時の船員の給与や待遇が著しく不平等だったので、これを改善するため、昭和10年に大新丸を建造し、村内の船員を乗せて操業していたが、船の事故や、漁協内部の対立抗争が起こり、船も遭難し村長の理想は実現しないで不幸な始末を迎えた。こうした事実も今回の研究の中で十分検証しなければならない項目のひとつである。この時代の研究の重要な項目として、漁船の徴用問題がある。当地区では徴用船での戦死者が多くあった。その実態は不明のところが多く、また記憶から消滅しようとしている時、この面の事実を解明して後世に記録を残すようにしたい。【3】戦後の遠洋漁業(昭和20年から現在)終戦直後は、大戦で生き残った漁船を使っての遠洋漁業が再開された。世の中が安定してくるにつれて遠洋漁業も活気を呈し、漁船の大型化、装備の近代化が急速に進み、漁場は赤道を越え、長期操業時代に入った。この時期の研究項目として、(1)漁船の装備の発達(2)漁場の拡大(3)船員労働の近代化(4)漁獲制限と減船の4項目を重点に研究することにした。【4】今日の遠洋漁業不振の時代に、これまでの漁業経営者や漁船員はどのようにして困難な状況を克服してきたのかを明らかにし、漁業関係者は勿論、地域の人々に遠洋漁業の振興を考える資料としることを期待している。

研究計画(年次別)

★年次ごとに研究計画と予算の関係が分かるように具体的に書いてください。

第1年度

1. 研究主題の検討と資料収集の計画

【1】4. 5月に数回程、研究部会を開き研究主題の検討を行う。

【2】研究テーマと分担を行う。

(1)和船時代の漁業 千葉勝衛 (2)機械船時代の漁業 水上忠夫 (3)戦後の漁業 菊田栄四郎
* (1)は、和船時代を全員で研究し、研究主題やテーマについての共通理解を進め、研究方法の習熟化を図る。

【2】利用できる資料

(1)大島漁協文庫資料 役場2「免許漁業人名簿」 役場12「小船問別帳」

(2)外畑文書 4-100 明治11年「船数・船税調」 4-171 明治18年「運上金関係」
5-51 明治17年「漁業者名簿」 5-92 明治17年「漁種別・規模別 漁船調」
5-90 明治19年「新規造船検査調」

(3)大要害文書(水産総合研究センター所蔵)

明治9年「鰹舟水上売金控帳」 明治10年「鰹舟以料覚帳」「鰹舟浦待帳」「鯖鮪網四番船水上売金帳」
明治25年「鰹舟方勘定調帳」 明治30年「鰹水上金売金入料帳」

【4】地区内訪問調査

①小山家(外畑文書)②村上家(大要害文書)③小野寺家(駒形文書)④その他の和船経営者宅など(謝金は諸謝金から)

【5】研究部会

1、毎月1回の定例会を行う。会場は大島公民館会議室(使用料は会場費から)

【6】神奈川大学での研究会(国内旅費から)

大島地区参加者4名、仙台市内参加者2名

【7】国立研究開発法人水産総合研究センター(神奈川県横浜市)で研究調査を行う。

大要害文書を中心に、鰹漁関係資料、共栄丸関係資料を中心に調査する。

第2年度

【1】研究テーマごとの分担研究

(1)和船時代の漁業 千葉勝衛 (2)機械船時代の漁業 水上忠夫 (3)戦後の漁業 菊田栄四郎

【2】利用できる資料

前年度の資料に加え、小中学校の進路調査資料、地区内の各資料を利用する。

【3】聞き取り調査

①機械船経営者(前川漁業部、桜田水産など) ②各年代の漁船乗組員(鮪船乗船者) ③徴用船乗船者(生存者・遺族、など)